

政治経済学部教務部インタビュー

2011年12月19日、場所：早稲田大学早稲田キャンパス

インタビュー担当者：松本哲弥、真下信幸

松本　　まずそもそも、政治経済学部で勉強してきてたんですが、どういうふうに授業を設定しているのか、授業をする人を決められているのかということを中心に勉強してきたんです。こういったことはどういったシステムで決められているのでしょうか？

教務部主任　　まず学術院と書いてあるんですが、学術院というのは学部と大学院と研究所をあわせた総合的な組織で、これに教育権限があるわけではないので、まずは学部、皆さんが言うんだったら学部、それから大学院の政治学研究科から公共経営研究科までが一応、教育機関としての呼称になっているわけですね。学術院というのは一体となっている組織の人員を配置している所ということですので、当面は皆様で言うと学部ということになると思うんですけども。

学部っていうのはどういうふうに授業を組み立てているのかという質問なんですが、これは大学の設置基準というのがあってですね、それを基準に則っているということが大事なんですけども。政治経済学部は3つの学科に分かれているのはご存知のとおりだと思うんですけども、その学科ごとに目標を立てていて、その目標にあうようにということ。ただ大学の場合だと高校みたいに学習指導要領みたいなものがあるわけでなく、それぞれの大学で標準的な目的を設定してもいいんですけども、ただ124単位以上作らないといけないということで、また2時間の授業を週1回で15回すると2単位だということが決まっていて、あとは作り方はどうするかっていうことは決まっているわけだけども。大まかにはいくつかのパートに分かれていて、政治や専門学科が設置している趣旨というのが政治学科だったら政治学を学ぶ、経済学科だったら経済学を学ぶし、国際政治経済学科だったら国際政経をとということなんで、その主たる科目というのがいくつか配当されるということになるわけです。

それから外国語、語学というのを設置していて、それ以外にも学問はあるので、特に政治経済学部は3学科体制になっているので、相手方の学科、自分が属していない学科の科目もあるわけで、その位置付けっていうのは基本的にその次に来るわけです。更に、広く他のことも学んだ方がいいという側面もあるので、昔の言葉で言うと一般教養科目、今だと学部共通科目もクラスターになっています。

大まかにカリキュラムというのはそういうふうに決めると。だいたいどこでも同じ決め方になっています。

松本 それは別の大学でも？

教務部主任 別でも、大学はだいたいそういうふうにして決めるということになっているんです。昔は専門の科目と、一般教養の科目ってはっきりと分けるという形だったんですけども、今はそういう形ではなくて、その学科で学ぶに当たって必要なことを教えるということになっています。

それで、経済のほうは結構スタンダードなものというのがはっきりしていて、何を教えていくかというのは段階を踏んで、マクロミクロの入門編、中級、上級、という形ではっきりとすると思うんですけども、政治学のほうはあまりはっきりしていないという側面もこれはどうしても学問の性質上ある。片方で伝統的なプラトン、アリストテレスからの政治学という物と、今の融合した、ゲームセオリーとかあるいは計量分析を使った現代的なもの、これをバランス良く 2 つ並ぶように作ってあるということです。一応標準的な政治学なり経済学なりというのを想定して、それが基礎から中級ぐらいまで取れるようにしています。それから学びたい所を学べるようにしないと力がつかないということで学びたいと思う分野を取れるように割りとは自由なカリキュラムになっているんだと思いますよね。だから基礎を学んだら、あとは自分の関心に従って、例えば国際関係に関心があれば、国際経済学とか貿易論とか国際金融論とかいろんなのを取れるようにしていると。でもできる限り、一つの関心に特化しないで複数の科目をとって下さいという形で、学部生の頃には広く基礎力をつけるということを決めていると。

で、誰が教えるのかというのはなかなか難しいことで、専任の教員というのが雇われていてですね、ある科目を主に教えるというふうには採用されているんですけども、ただそうは言っても全てそうやって埋められるわけではないので非常勤の先生を探してくると、そういうことになっているわけです。

松本 例えばこの政治学の科目を「この人に教えてもらおう」というときは？

教務部主任 それはお互いに話しあってですね。一定の好き嫌いではなくて、得意不得意があるわけですよ。例えば思想系が強い先生もいれば、計量系が強い先生もいるわけで、その先生方が交代しながら政治学の授業を持つということになっているわけです。経済の方も、入門経済学を持つということになっているわけです。ただ問題は、高校までだと先生方も、ご存知のように、教育実習などをして訓練をされるわけだけど、大学というのはそういうのが無いので、教え方がうまい先生もいればあまり良くないという先生がいることも事実なんだけど、ただ今は割りとは採用するとき講義なんかをして上手な人を採用するというふうになっているので、段々と昔ながらの人がずっと入れ替わればもうちょっとあれかな、という感じはしますね。

そうは言っても、教え方が下手でも面白いこと言ってることもあるので、そういうのは皆が関心を持って聞けばそれなりに面白いこと言ってるはずなんで、エンター

テイナーである必要は必ずしも教員は無いので。面白いという感覚でいくとそういう方が面白いということになります。それは大学がやることでは無いはず。なので、問題の関心を引きつけて、皆に分かりやすく説明するという事なんですけど、その分かりやすさというのは色々。聞く人によっても変わるのでね。僕も講義をやっているんですけども、ある人にとっては非常に分かりやすかったということも、ある人にとっては分かりにくかった、あるいは簡単過ぎるという風に言われることもあるので、受け取る方の皆さんの聞く態度などによっても左右されるので。まあそこが難しいところですよ、大学っていうのは。高校みたいに画一した何かがあるわけではないので、高校までと違ってね。

で、難易度に差が見られるということなんですけど、共通してる科目についてはできる限り標準的にするように今はしていて、語学も昔は先生によって当たり外れがあって、同じ科目なのにものすごく大変な先生と非常に楽な先生といたんですが、今は語学も目標を決めて。できる限り必修でみんなやらないといけないものは目標ラインを決めて、大体同じぐらいに。ただ人間がやることなので、好き嫌いとか色々あるので、必ずしも完全にぴったり、同じにいくということは…。逆に機械がやるんだったらあまり面白くないはず。また大学に来る面白みもないはずなので。そうは言っても、基本的なところは一緒になるようにできる限り話しあってですね、共通の目標を設定していると。

ただ、名前が変わっちゃうと、その科目によって難易度が変わっちゃうということはあるんですよ。例えば国際経済学っていうものと、貿易論っていうもので、似てるような気がするけども、名前が違うからそれぞれ独自に設定されているので、片方が簡単であって片方が難しいと思うということはあるかも知れませんが、これも一旦、我々がカリキュラムの中で話し合っていて、全体の目標っていうのを立てているんですけども、ただ実際の教え方というのは教員の教え方に委ねられているわけで。これはやはり伝統的に学問の自由とか大学の自治とかに関係してくるので、先生に委ねられているので、まあ感じが違うということはあるかもしれない。ただそれはできる限り少なくなるようにしているということです。

真下 単位の取得状況の、成績ごとのパーセンテージとかも開示されてると思うんですけども、そういうのも「これ明らかに落としてないな」というのも見受けられるんですが、それは？

教務部主任 それはお互いに、教授会で数値を公開していますんで、お互いに理由が合えばいい。例えば数学なんかの場合だとですね、課題を出して、解けると非常に解けるので、出来てる人をわざわざ低いものに置く必要はないので、例えば上位が、A+が数が多くなるとは思いますが、それは科目の性質によるので、必ずしも皆が同じようになる必要はなくて、きちんと教育がされてるということが大事なわけです。ただあまりにもバランスが悪いように、例えば 350 人というのが政経で一

番大きなサイズのクラスですけど、350人のクラスで300人がA+だということちょっと不自然なことですよ、今の政経の状況の中で言うと。個人的な接触があるわけではないわけです。ある人は質問に行くかもしれないですけど、多くの人は座っているだけなわけで顔は特定されていないわけですよ。その人がどういうふうに努力したのかが分かるわけであれば、分布っていうものを考える必要は無いわけですけど、大きな教室の中で試験が2回ぐらいあるぐらいのもので評価するのであれば、分布は重要視していて、できる限り適正な分布になるようにという目標値を定めていて、それに合うように、ということ。合っていないものについては学部委員会、まあ教授会ですね、そこで我々自身で点検をして、理由があれば問題ないわけけども、その理由をお互いに点検しあうということになっているわけです。

真下 その学部の教授会というのでは、他にはどういったことを話されているのですか？

教務部主任 いや、もともと科目の設定の仕方ですよ、そのカリキュラムだったり。今だと来年どういう教員が担当するかというのをずっと決めているところですよ。

松本 その教授会という場でその授業の内容であったり？

教務部主任 もちろん細かいことが教授会で話されるわけではなくて、もうちょっと下部の、政治だったら政治の教授会で集まる所、経済だったら、国際政経だったらという形に、そこで話し合われるわけですけども。結果的に一番、学部のことについて意思決定として、学部運営委員会、学部の教授会っていうものなので、最終的なものはそこで決めるということです。だけどそこは100人ぐらいいる所帯ですから、そんな議論ができるわけではないので、実際にはさっき言ったように政治の会とか、あるいはカリキュラムを考える会という教員の委員会というがあるので、そこで議論するということですかね。

松本 学科ごとに？

教務部主任 学科ごとにバラバラにして、カリキュラム全体を学部全体で考える委員会というのもあるので、そこで考えたりするということですね、実際には。

松本 目的に沿って委員会があるということですね。ということは教育の内容などを決めるのは教授の方々ということですか？

教務部主任 それはまあ大体そうですね。それは大学の自治ということなので。ただ時に応じて外部から、ちょうど来年、第三者評価を受けるんですけども、そういう指摘を受けて考えるところですね。皆さんの意見を聞くということもあるわけですね。国際政経は特に、新設当初の時はしょっちゅうですね、ゼミを通じて学生の意見を聞いて修正していったんですよ。

真下 その第三者というのは？

教務部主任 それは決まっているんです。国のシステムとして受けないといけないということが決まっていて、大学基準協会というそういうことをしているところがあ

って、来年もまた。前にも受けているんです、5年に一度受けるんです。

松本 それは文部科学省であつたりですか？

教務部主任 いやいや、文部科学省自体がやっていたら教育の自由への介入になるから、一応第三者の、文科省でもなく、大学自体でもない、専門にそういうことを研究している機関というのがあって、そこに報告書を出して、現地に授業とか施設とかを見に来て、学生たちとも面談すると思うんですよね。そういうことをして、ちゃんと教育が行われているかということを確認するんです。

松本 なるほど。そういった人達の意見は一般の標準みたいなものと考えられるんですか？

教務部主任 それは一般の標準というのをどこに置くかということによっても違うんですが、それは色々な大学を見てきているので、その人達は専門家なので、「この大学の良いところとこの大学の悪いところ」というようなことを指摘してくれるので、我々も反省すべきところは反省してやり直すということです。

松本 なるほど、フィードバックということです。

教務部主任 そうそう。やっぱり自分たちの特徴というのは他との比較でわかるものでしょう。

松本 ちなみに、微妙に話が戻ってしまうのですが、学科ごとの目標であつたり、124単位という枠であつたり、そういったことはどの主体が決めているのですか？

教務部主任 124単位というのは文科省が決めているので、これは変えられないんですよ。それを上積みしても構わないんだけど、124単位にするというのは教授会で決めたことです。基本的には教授会で決めているわけですよ。

松本 それは質を担保するための基準ということですか？

教務部主任 そうですね。それは124という数字は国が決めているわけですけど、それをどう使うかというのは我々が決めているわけです。

松本 学科ごとの目標というのは学科で？

教務部主任 そうですね。学科で決めて、さっき言った学部の教授会で最終的に決めて公表しているわけです。ホームページでも見られますよ。ポリシーというやつですね。入学のポリシーと出るときポリシーというやつです。

松本 ホームページでも確認しました。

教務部主任 それも公表しておかないといけないことになっているんでね、文科省の指導によって。

松本 大学全体としては？

教務部主任 大学全体の意思決定というのはなかなか難しいんですけど、早稲田大学だと私立大学なので、学校法人早稲田大学という法人組織があるわけですよ。法人組織というのは、例えば僕を雇っているのは法人なわけです。法人じゃないと権利義務関係の主体には成り得ないので。

だけでも、それだけじゃなくて片方で教学の組織というのがあって、教学の組織というのは総長がいて理事がいらっしゃるんだけど、それだけじゃなくて学術院長が集まる学術院長会というのがあるんですね。そこが決めるということになるんです。

松本 大学として意思をもつということはありませんか？

教務部主任 いやいや、例えば最近、今年だと大学を始める期間を遅らせるというのは大学として意思を決めているわけですけど、それは臨時に学術院長会を開いてそこで決めたわけです。もちろん臨時に決める前には「来年はこうする」というふうに今の段階で決めてあるわけですよ。2012年もう決まっているわけです。それを決めるのも学術院長会というところで決めるわけです。

松本 この学術ということは下から意見を集約して？

教務部主任 そこはなかなかややこしくって、なかなかそういうふうには出来てなくて。大学全体のことというのは、大学が、総長以下の理事者が率先するということが多いわけです。だけど学部や学術院からお願いをしていくということも。例えば国際政治経済学科を作った時も、これは学則変更が伴われるわけですね。それまでは学則上「政治経済学部というのを設置する」ということが書かれてあって、その中で「政治学科、経済学科を設置する」というのが書いてあるわけですね。その学則を変えて国際政治経済学科を設置するということを決めないといけないので、学則を決めるのは先ほどの学術院長会なので、そこに提案をしないとイケないわけですけど、その提案のためには我々のほうで「学部のありかたを見なおしてこう考えますので」ということを本部に、大学のほうに言わないとイケない。教務を担当してる部署に言わないとイケない。そこで実際に今の法律なり規則なりにあっているとか、あるいは人員教員の数が足りているとかか学生数が適切とかか、色々なことを相談してですね、それでようやく「これでいい」ということになったら、その会議体に提出することになるので。

だから両方ですよ。大学全体に関わることであれば、大学全体の執行部というのがあるし、我々はそれぞれの学術院だけど、決めるということは必ず学則によるということになるわけなので、我々の方から提案をしていってという、その2通りですよ。だから理工の方で起こったこともその会議体に関わるわけですね、学術院長会に。だから関係ないけど、関係あるわけですよ、早稲田大学全体として。そういった決め方ですよ。

松本 なるほど、スクラムを組んでいるというか。

教務部主任 そうですね。それぞれ独立しているけど、連合しているという形です。

松本 これで、2つめの意思決定プロセスというのがなんとなく見えたような感じがあります。

教務部主任 他の学術院の運営なんかはよく分からないです。それぞれが独特にやっているの、同じようにやっているわけではないです。2つの学術院に属するとい

うことはないので、基本的には、それぞれの学術院がそれぞれのルールでやっているということですね。

松本 学術院はカテゴリーと言いますか…以前は学術院は無かったわけですよね？

教務部主任 そうですね、学部と大学院だったわけですよね。それから研究所。それを合わせて学術院にしたわけですよね。2004年かな。なのでその中の作り方というのは色々で、政経でやっていることが…。そもそも「政治経済学学術院」と言っ
てなくて「政治経済学術院」でしょ？ただ法学は「法学学術院」で、「学学」になっているわけです。「文学学術院」ですし。名前の付け方もそれぞれで決めてよ
かったんで、そこから自由というか独自にやるということが。さっき言った大学の
自治というのは学部の自治なんで、学部の自治というのは今の早稲田では学術院の
自治になっているわけです。原則として学術院に一つの教授会を置くということと
か学術院長を選ぶとか、共通的なことだけは決めてあるわけですね、大学の規則で
は。あとを実際にどうするかというのはそれぞれの機関で判断をするということに
なっているんです。

松本 学部が何かを決めるときに学術院から学部に提案が来るということも？

教務部主任 そうですね、来るっていうこともあるんですけども、作り方としては、
だいたいどの学術院もそれぞれの基礎となるものがあるわけですね、学部なり大
学院なり。それぞれはそれぞれに一応会議体を持っているわけですね。さっき言っ
た学部の教授会に、政治学研究科であれば政治学研究科の運営委員会というのがある
わけですね。そこで決めることと、それから学術院の教授会、全体の教授会で決
めることというのは一応区分けしてあるんです。「この事項はこっち」という風に、
最初から、一番最初に学術院を決めるときにね。なのでだいたいそれに合わせて「こ
っちでやるか、こっちでやるか」ということを振り分けているわけです。だから学
部の、例えばカリキュラムの問題であつたり、学部の学生が不祥事を起こして処分
されるということになったら、それは学術院の教授会にかかるのではなくて学部の
運営委員会にかかるということになっているわけです。

松本 ケースごとにどう扱うかというのは？

教務部主任 それは初めから決まっているわけです。一番関係するところで決める
というふうに。ただし、一番最高の意思決定機関というのは学術院教授会というこ
とになっているわけです。そうじゃないと秩序が保てないでしょ？上にあるものほ
うが上にないとですね、下部のものが上にあってはいけないわけで。下位組織が学
部と大学院3つ、今だと3つだけですね、それから現政研（現代政治経済研究所）
という組織を束ねているということです。

松本 ということは、学部の意向が上に上がって、でも学術院レベルでは「ちょっとそれは
困る」という話になることも？

教務部主任 もちろんそれはあり得ますよね。それはそうですね、色んな機関があ

るわけですから。

松本 例えはどういったケースが考えられますか？

教務部主任 そんなに…。抽象的にはそうですけど、具体的には今のところそんなに無いですね。抽象的にはそれはあり得るわけですけども、それは。組織の決定というわけですから、それぞれにそれぞれのあれがあるでしょう。

松本 それが意思決定に影響してきたりとかは？

教務部主任 それは無いですよ。特にはね。

松本 では学生に絡んだところに質問を移していこうと思うのですが、学部や学術院としてどういった教育をしていきたいかとおもいますか？卒業時にどういった学生になってほしいと考えていますか？

例えば教える科目であったりが教授に、研究職につきたい人のためのものであったり、あるいは就職に絡めていきたいというふうに考える学生がいたり、色々あると思うのですが。

教務部主任 そうですね、それは様々です。それぞれの人の目標に応じて、それぞれキャリアを考えてもらえれば良いというふうに考えていますので、こうでないといけないということは特に無いのです。一応このディプロマ・ポリシーというところに目標は書いてあって、グローバルな社会でリーダーになるべく、どの分野にあってリーダーになるべくということを期待はしているわけです。それは学生それぞれに特徴があるわけで、こうでないといけないということは無いわけです。特に政治学を学んだから政治家になることを期待しているということはないので、どの分野に行ってもリーダーとして活躍してもらいたいということは考えていますけども、そこまで具体的にこういう職業につかないといけないということは全く無いですね。

松本 学校で学んできたことと実際に就職した先が全く関係が無いということもよくあると思うのですが…？

教務部主任 それはそうですね。そういうことのほうが圧倒的に多いんじゃないですかね、日本の場合はね。

松本 それはもっと結びついたほうが良いというように考えられたりしますか？

教務部主任 それは色々で、何を目標にするかというのによって違って、大学というところが広く教養を身につけるところであると設定すればそんなに直結しないのは当たり前ですよ。ただ、もっとプロフェッショナルスクールのようなものを展開すべきであると考えれば、それは直結すべきですよ。医学部が医者になるということに直結しているのと同じようにそういうふうになるのがいいんでしょうけど、政治や経済という特徴から直結はしないですよ、なかなかね。それぞれ一部直結するというぐらいで。

ただ、政治も経済も結局社会をどう見るかということでしょう？現代の複雑な社会

を。それを学問を通して何らか身に着けているのであれば、それぞれ社会に出たら社会に関わるわけで、それには生きるんじゃないかと思っているんですがね。特に複雑多岐に渡る社会をです、自分なりに理解するという事について何かしらの役に立つのではないかというふうに考えていますね。

松本 社会人の方とお会いしてもよく言われることですね。

教務部主任 あまりに直結してたら、逆に面白くなくなるんじゃないですか。職業訓練学校でしかなくなるわけだから。それは必要になればそういう訓練を受ければいいわけで、大学時代ってまだなわけじゃないですか。18、19～22歳の時代、もっと根本的に考えるということをしたほうが良いんじゃないか。直結して身についたものは直結してすぐ消えてこと、逆に言えば。政治のほうだと考えてみれば、プラトンやアリストテレスの時代から同じような問いを立ててるけども全然解決していないわけで。もし彼らが言っていたことを我々が理解できている、もし実現していたら、こんな政治の低迷も無いわけで。だけどそうはなっていないわけで、やっぱり人間の社会というのは根本的に問題があるわけだから、そういうことについて社会科学を通じて学ぶということが意味のあることではないかなと思いますね。

松本 確かに将来の職業に直結したことであれば、その選択肢から外れた時に役に立たなくなるということですよ。

教務部主任 そうですよ。だから医者が医学部にいて医者にならなかつたらどうするかということですよ。

松本 今の学部の卒業生の就活の成果であったり、そういったものは学部としてはそこまで重要ではないというふうに考えられますか？

教務部主任 いえいえ、それは重要だという風には考えているんですけども、何が大事かという、皆さん自身が目標を立てて将来を展望してどういう仕事をしたいかというモチベーションを高めていってもらいたいことは大事だと思っていて、具体的にどこに行ったかということは結果でしかなくて、それはたまたま上手く行ったということもあるし、たまたま上手くいかなかったということもあるんで、それよりも将来を設計するという事について考えてもらいたいという意味で、キャリアは重視していると思いますよ。特に一年生の入学オリエンテーションの頃からキャリアの話をしていますよね、今。皆さんも聞かれたとおもいますが、それともつい最近のことで、昔は何もしてなかったんですけども、そういうことも早い段階からどういうふうに自分の一生を考えていくかっていうことで。早く考えたら早く考えたにこしたことは無いわけなので。そういうことを促しているだけであって、「どこにどうならないといけない」ということは我々としては言っていないですね。幾つかのモデルを示すということはあるとしてもですね。

松本 以前はやっていなかったということは、何かの以前の状況を受けてやるようになったということですか？

教務部主任　　そういうことでもなくて、昔からやったほうが良かったことをやってなかったんじゃないかということなんじゃないですかね。それに大学全体が、世の中の大学全体がそういうふうになってきたからじゃないですかね。キャリアをやっぱり強調するということに。少子化になって子供の取り合いになっているからということなんじゃないですかね。昔は向こうからお客さんは来てくれたわけですけど、ということなんじゃないですかね。

松本　　競争の結果ということですか？

教務部主任　　そういうわけでも無いですけど。早稲田は生徒は基本的にどこにでも行けたわけですよ。はっきり言って。僕らの頃なんてどこにでも行けましたよ、政経にいればね。でもそういう時代でも無くなっているということも事実なんで、やっぱり。昔は大学に入るときの力を企業は買っていたわけですよ。大学で勉強するなって企業が言っていたわけなんで。「妙なことを勉強されては困ります」と言っていたわけですね。今はそんなことを言う会社はなくなって、良い学生を送って下さいとしか言わないわけです。やっぱりきちんと学ぶ基礎があるというか、英語なんか当然出来て当たり前だということになっているわけです。そういう時代の変化というのもあるんじゃないですかね。日本が世界の中で置かれている地位が変わってきているということもあるでしょうし。そういうことによるんじゃないですか。こういうふうになってきたということは。

松本　　学ぶべきところだけでもなく、社会からのフィードバックもかなり重要？

教務部主任　　それはそうですね。大学は社会の中にあるわけですからね。間違いないことだと思います。特にもう入り口のところじゃなくて出口のところが必要な人のレベルを測るということであれば、出口のところできちんとしないと困るということですよ。それはね。皆さんも困るし我々も困るということですよ。だんだん出口のところできちんと点検するようになってきたということですね。

松本　　そういった企業でしたり卒業生でしたり社会人でしたり、そういうフィードバックというのはどういうふうを受けているんですか？

教務部主任　　直接的には我々の政治経済学部を卒業した OB の政経会、皆さんも卒業したら入れます。この政経会という OB がいて、我々、大学の執行部のメンバーも理事になっているので、それを通じて色々な感触を得るということもありますよね。それから寄付講座というのをしてもらってますよね。そういう時に接触するということもあるし、企業の方から接触したいというおっしゃってくることもあるし。いろんな形がありますよね。

松本　　企業からの場合もあるんですか？

教務部主任　　ありますね。早稲田の場合だと、たくさん送り出している会社だとあいさつにいらっしやったりしますよね。良い人を送って下さいということと言われるわけです。良くない人はいませんということを言うわけです。かつてはそんなこ

とは無かったと思うんですが、ここ最近の傾向ですね。

松本 「良い人」というのは具体的には言ってこないんですか？

教務部主任 それもそれぞれに、会社によって方針があるし、会社って言っても大きい会社だと部署によっても違うわけで、それによって色々言ってきますよね。それぞれに合うようにということなので、一概に何がいいかということとは言えないわけですけど、ただ良い人が欲しいというのは事実なので、それは具体的な過程の中で判明していくことだと思いますね。

松本 どういった人が選ばれるか、選ばれた人がすなわち…。

教務部主任 良い人だということでしょうけどね。はっきりしていることはやっぱり基本的な、情報を収集して理解して、そして分かりやすく伝えるという基本的な作業をきちんとできるということは会社としては求めているでしょうね。なにも例えば経済学に直結はしないかもしれないけども、そういう情報収集して分析して発信するというのはどの会社に行っても必要なことなので、それがあつた学問の分野でできるということはその職場でトレーニングしていけばかなり出来るということになる素材だというふうに見るということですから、そういうことじゃないですかね。だから基礎力というのが大事だということですよ。基礎力を重視というのは我々もカリキュラムで言ってるとおりで、基礎力があつたら色んなところで応用できるわけですからね。

松本 ということは企業が求めているものと学部として教えたものが反発しあうということはあるということですか？

教務部主任 あまり無いんじゃないか、というのが我々の感覚ですね。ぴったり合うこともまた無いとは思いますがね。ぴったり合ったら別のものになるわけで。同じものである必要は無いわけですけども。だけでも我々の教育で何も早稲田に特有のことを教えるということもないわけで、世界に出て通用することを教えるということなので、それは学問の世界に限っているわけではないので。だから、そんなに違わないんじゃないかとおもいますけどね。

松本 ということはそれら（フィードバック）は既に取り入れられている、実施されているということですか？

教務部主任 実施しているということではないですかね。そういう能力がある人が取られていってるということなんじゃないですかね。

松本 おそらく学生がかなり気にしているところだと思うのですが、学生から「どういふふうにしてほしい」というフィードバックを集めたりということも？

教務部主任 今は授業アンケートしていますよね？あれは一応直接的に関係することとしては重要なことだと思うのですが、残念ながら学生の参加があまり無いので、直接参加してもらいたいと思うのですが、これは直接みんなが授業を良くしていく一番の良い方法だと思います。

それからメールを…受け付けてますよね？目安箱っていうのを昔は設置していましたが…

職員ん 今は無いかもしれないですね。

教務部主任 昔は 3 号館にあったときは置いてあって、みんなが意見を言う箱があったんですが、今はメールで。しょっちゅう来てますよね？要望がね。それでもっともな要望には応じていっているということです。かなり応じていってると思いますけど。

松本 かなりの数が集まっているということですか？

教務部主任 かなりをどこに置くかによりますけどね。それからくだらないというか変なというか、何というか、ただ気晴らししているだけっていうのもあるのですね。そういうのにはこたえて無いですけど。まあ色んな「こういう問題がある」ということを知る契機にありますよね。あるいは面談してほしいというのが来る時もありますよね。「進路について困っているから」とかね。そういうのが来る時はありますね。そういう時にはすぐ手分けして最も適した、我々、執行部のメンバーが面談するというのもしています。そういう使われ方もしていますよね。それに事務所に直接来て皆さんよく来てしゃべっているじゃないですか。あれだって意見を言って考えて回答しているというフィードバックを、我々としては得ているということです。そういった色々なことをしているわけです。

松本 どれか一つのフィードバックを重要視するわけではなく、またないがしろにするわけでもなく？

教務部主任 そうですよ、そうです。それはやっぱり大学の置かれている状況というのに影響されていて、そもそもは学生に対して教育を施す場所ですから、学生が一番大事ですけども、だけどもかつての学生だった人というのはまさに経験しておられるわけですから、卒業生というのはやっぱり重要なことだと思いますよね。そのフィードバックを、ということですよ。社会一般的に企業等から話なども。重なる部分もあるわけですよ、卒業生と。それから他の学校との交流というのもあったりしますね。

松本 そういった場では運営の方法を共有しあったりということですか？

教務部主任 そんなに、それをどれぐらい共有するかというのは別ですけど、我々は英語を、学位プログラムを始めていますよね。英語だけで 124 単位取れるようにするというものですが。ああいったものを始めるにあたってはですね、いろんなところに問い合わせをしたり、国際教養学部が早稲田の中では最初にやっていたので色々きいたりとかそういったこともあるわけですね。あるいは新しいことをやるとなったら大学の本部に聞きに行っ、そこから紹介してもらおうとかですね。いろんなことをやっていますよね。

松本 国から直接要望があったりということもありますか？

教務部主任 国から直接要望があるということはありますか？

松本 国からはシステム、124単位といったのを決めるシステムだけですか？

教務部主任 まあですけど、今は国からの要望というのには「色々なプログラムに応募しろ」というのがあって、さっき言った G30、国際英語学位プログラムも、あれも補助金制度、公募による補助金制度なわけで、そういう形で向こうの要望、国の要望は出しているということですよ。国際化拠点として存在するようにするというようなわけです。

真下 今は15回授業を行なっているじゃないですか？昔は…。

教務部主任 そうそう、昔は本当に短かったんで、それはまあ確かに文科省の要望ではありますよね。

真下 それは大学設置基準というのが変わったということですか？

教務部主任 変わってない。本来そうだったのがサボっていただけなんです。それはお互いにそれでいい、というようなことだったんで、きちんと15回やるということになったわけです。もともと15回、2時間を…90分の授業を2時間と呼んでるんですけども、2時間の授業を15回して2単位だという決め方なのでね。それは変わってない。13回プラス試験ぐらいかな、それぐらいだったと思うけど。15はきっちりするということになったわけですけども。それは確かにそうですね。

松本 となると、国から直接「こう変えろ」ということは無いということですね。

教務部主任 そうですね。それをすると色々と国としても困るから。大学に介入することになるんで。それを、お互いにこまることはやらないということなんじゃないですかね。ただ申請は、新しい学部を作ったりとか、そういうふうになると認可申請が会ってですね、それはまた色々と複雑なことになりますけど。政経みたいに130年もある学科、学部だとあんまり直接的に影響を受けるということはないですね。

松本 それは国際教養学部の時とかだとやっぱり…。

教務部主任 もちろん作る時に…作るということになると…。この政経だって、国際政経を作るときにはちゃんと届け出をだしているわけで。それは昔と違って届け出で済むことになっているのですね、自由化されてきている。だいぶ違うと思います。いずれにしても、そこでは一応審査を受けないと行けないということになっているので、それにあつてるようにしないといけないというのは事実です。それを通じてコントロールされるということはまあありますね。

松本 今までの話しを伺ってきた感じだと、大学だけが物事を決めるといいますか…一つの定まった理想というのがあるわけではなく、色々とフィードバックを受けたりして、教えるべきものであったり、政治経済の中で教えたいたいものであったり、そういうところを調整しているということですよ。

教務部主任 そうですね。基本的にやりたいことというのはもちろんあるわけですが

ど、それは実際に例えば今の日本の高等教育として成り立つかどうかということだ
って重要なことなわけじゃないですか。急に相対性理論ばかり教えたって成り立
たないわけじゃないですか。教えたいのはそれよりも上のことだと考えたとしてで
すね。そういうのだけを教えたいと思っても、やっぱり高等教育機関として果たす
べき役割というものはあるわけで、それに合うようにするということが、よく考えて
みれば社会の中に存在しているということですね。社会の中の動きによって変わっ
てくる側面もどうしてもあるんじゃないですかね。でも悪いっていうわけじゃなく
て、それは主体的に我々はどうしていくかという問題であって、そして大学という
のは自治権があるので、自らどう考えるか、ということなわけですね。やればそれ
だけ良いことになるだろうと思っているからやっているわけで、やらないといけな
いという義務があるからやっているわけではないので、それはやっぱり違うところ
ですね。命令服従関係にあるわけではないので。そこはやはり高校までとは違う所
ですよ。

松本 教える内容を決めることができるということですね。

教務部主任 自分たちが決めることができるわけですね。それは本来であれば、教授
の研究の成果を発表するというのが大学の講義の場なわけで、それがまさに学問の
自由ですね。

松本 教授の専門によって授業の内容が変わってしまったり…。

教務部主任 それはそうですよね。それは仕方ないじゃないですか。学問の性質に応
じるわけなんで。それは話し合っただけで全体的にどういうふうにしていくかは決めてい
ます。ある程度は合意は出来ても、最終的な判断というのは大学という制度が持つ
ている特徴であるので。その先生から教える立場を奪うということは大学自身を否
定することになるので、それは出来ません。お互いに話し合っ、「こういうふう
にして行きましょう」というラインぐらいは決められても、具体的な中身は決め
られないわけで。そこは高校とは全然違うわけです。

松本 なるべく教える自由には手を付けないようにするということですね。その自由と、
その教えるべき標準というのがぶつかったりというのがぶつかったりというこ
ともありますよね。

教務部主任 ありますよ。だから話し合っ標準的なことにする、特に基礎的な科目
は標準的なものにするということにして、共通のテキストを作ったりとかいろんな
ことをしているわけです。努力をしているわけですよ。それは自発的な形でして
いるわけですよ。それは学部長がやれと言って命令しているわけではなくて。

松本 せめぎあいを感じられますね。